

第59回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

保険はお守り

山口県 周南市立熊毛中学校 二学年

梶山 咲良

私の祖母は生命保険会社に長年勤めていた。もう定年退職したが、生命保険に関してとても詳しい人だ。私は祖母に生命保険についていろいろ聞いてみた。生命保険はいろいろな種類があり、私たちの暮らしに密接に関わっている大切なものだと教えてくれた。

先日、父の生命保険の更新をする機会があり保険会社の担当者さんが家に来ることになった。父母ともに生命保険に詳しくないので、祖母に同席してもらい、相談に乗ってもらしながら更新内容などを決めることになった。

父は心のどこかで、生命保険は自分にまだ関係のない話だと考えていた。父は生命保険の更新自体にも興味がなさそうだった。

保険会社の担当者さんから説明を聞いても、あまりピンと來ていない父を見て、祖母がこんなことを言つた。

「生命保険っていうのはね、お守りみたいなものなの。生命保険を使うということは、自分の身に何か起こった時よね？何も起こらないことに越したことはないの。それが一番の幸せ。生命保険を使わない健康が一番の幸せでも誰にでも万が一ということはある。病気やケガで治療にお金がかかつたり、時には働くことができなくなることもある。絶対にあってはいけないことだけど、予期せぬ死という最大の不幸もある。保険のお金で治療をしたり、残された家族にお金を残し、生活を守ることができ。保険に入るっていうのは、お守りを買つているって思うといいのよ。」

私はその話を聞いて、なるほどなあと思った。保険を使うようなことがなければ、毎月払うお金がもつたいないと思うかもしれない。でも、保険を使わないということは、父が元気で健康だという何にも代えられない幸福だ。

もしも父が病気になつてしまつたら、医学の進歩に合わせた最先端の治療を受けてもらいたい。そういう先進医療には莫大な治療費が必要ということも知つた。そういう保障がある保険に入つていれば、その治療費が給付される。それで病気が治る可能性はぐんと上がる。私は父にずっと元気でいてほしい。病気になつても絶対治つてほしい。

父と母も祖母の話を聞いて、

「なるほど。生命保険をお守りだと思えば、それを持つてているだけで安心した気持ちでいられるよね。」

第59回中学生作文コンクール

二人はそう言い、保険の更新と保障内容の見直しをした。

祖母は大叔母がガンになった時のことも話してくれた。祖母が生命保険会社に勤めていたので、大叔母は保障内容がしっかりととした保険に入っていた。手術や抗ガン剤、最先端の治療を受け、ガンは完治した。今は元気ぱりぱりだ。保険に入っていたことで、手術代や最先端治療費、抗ガン剤の費用、入院費、通院費、全てのお金が保険会社からすぐに病院へと支払われた。もちろん、保険に入っているからと言って、ガンの恐怖や心配、苦しみが本人や家族たちから消えることはない。でも、治療費などのお金の心配がないということは、心の負担を軽くするのだ。

治療法があつても、治療費がなくてそれを受けられないということは、当事者や家族にとって、どれだけ辛いことだろうか。もし家族がそんなことになつたら、私は悲しくて耐えられない。ガンは日本人の二人に一人がかかる病気だ。他人事ではない。

病気や死から人間は逃れられない。治療費を心配しないで治療が受けられる仕組みが生命保険にある。万が一の不幸に備える保障もある。生命保険も日々進化しているそうだ。

私は話を聞いているうちに、父が病気になつたら……と不安になり、泣きそよになつた。祖母は私の不安を察したのか

「お守りがあるから大丈夫だよ。」

と言つて、優しく背中をさすってくれた。祖母の手は温かく、私の不安はいつのまにか消えていた。祖母が私たちに生命保険のことを教えてくれて、考えるきっかけをくれて、本当に良かつたと思えた。